

正常と妄想の日常の連續性

じめどきく見知らぬひとかく、いし、すでにいま越えたところ
宇宙と交信しているとか、執拗にいるのかも知れない。

(しつよう)な尾行が続いている、などと訴える手紙をもらつことがある。

過労死や過労自殺の取材を通じて、人間の精神はもろいものだ、ということは理解できるようになつた。と同時に、自殺されるまで、家族は彼や彼女のいまの精神状況が自死を招く、といふことを理解していなかつた、といふこともわかつた。が、

この本であつかわれているのは、拒食症、アルコール依存症、うつ病、家庭内暴力、殺人未遂、殺人など、今ではさほど遠いと思えなくなつた世界や事件である。犯罪者の体験は異常なものに思えるが、それは病氣で、「精神病質も病氣である」「病氣である以上、突然、青天の霹靂のようにある個人に出現するものなのである」ともある。

最終章の「アナンカスト（強迫性格者）」の症例は、はたしてどのように回復するのか、とハラハラしながら読み続けさせる。素人は、どうしたら治せるのか、に関心をもつが、谷崎潤一郎などのように、強迫神経症から生みだされた小説はめずらしくない。「」でわたしただけは、「正常」と「妄想」の連続性など、日常的に心に狂いを生じる可能性を知らざれる。

著者は、安倍晋三元首相が辞任時に「うつ病」の症状を呈していたとみる。公人が自分の病気を公表することが、その治療の必要性に関する認知度を高める、との指摘には、そうあってほしい、と納得させられる。(謙ともいう。わたしたちは、明日、その境界線を越えるかもしけな



心に狂いが生じるとき 岩波 明著

(新潮社・一四七〇円)

著者は、「精神の『狂い』は、われわれが信じている安定した日常的な世界の風景が、実は單なるフィクションに過ぎないことを示唆するよりも思える」と書いている。「正常と狂気の境い目は、いく淡いものである」ともいう。わたしたちは、明日、その境界線を越えるかもしけな